

# どこでもドアのかぎ 2019

特集 おとなになっても読みたい絵本



新潟県立大学

2018年度卒業／2019年度入学記念



ほんものの本の中には、たくさんのものが詰まっています。

ほんものの本は、知識や理解を与えてくれるだけでなく、夢や、冒険や、驚きや、発見や、謎解きの楽しさや、感動や・・・とてもここには並べきれないほどの、数々の贈り物を私たちに与えてくれます。ほんものの本は、たとえ手のひらに乗るほど小さくても、一つの世界を、一つの宇宙を持っています。

数え切れないほどの本の中から、ほんものの本をみつけてほしい、しあわせな出会いをしてほしい。そう願いながら、みんなで知恵を出し合いました。

どの本もそれぞれ、自分の世界を持っているから、本の表紙、つまりその世界に通じる扉を開ければ、あなたはそのまま別世界に旅立てるのです。そう、まるで「どこでもドア」のように。

今号の特集「おとなになっても読みたい絵本」には、25の推薦がありました。なんと、一冊の絵本に3人から推薦が集まりました。あえて一か所にまとめませんでしたので、探しながら読んでみてください。

新潟県立大学生生活協同組合  
教職員フォーラム

## どこでもドアのかぎ 2019 目次

福嶋 秩子	(副学長)	.....	3
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	4
石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	12
若月 章	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	15
黒田 俊郎	(副学長／国際地域学部 国際地域学科)	.....	16
水上 則子	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	17
澁谷 義彦	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	18
太田 正之	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	19
Howard Brown	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	20

### 特集「おとなになっても読みたい絵本」

小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	22
石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	23
小澤 薫	(人間生活学部 子ども学科)	.....	25
小池 由佳	(人間生活学部 子ども学科)	.....	28
柳町 裕子	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	31
水上 則子	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	32
角張 慶子	(人間生活学部 子ども学科)	.....	35
太田 正之	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	36
神谷 睦代	(人間生活学部 子ども学科)	.....	39
太田 優子	(人間生活学部 健康栄養学科)	.....	40
福本 圭介	(国際地域学部 国際地域学科)	.....	41

副学長 福嶋 秩子

## 津波の霊たち 3・11 死と生の物語

リチャード ロイド パリー  
早川書房

3・11の津波ではたくさんの犠牲者がでたが、宮城県石巻市立大川小学校では74人の児童と10人の教職員が津波にのまれた。避難誘導がうまくいき、1人の犠牲者もでなかった学校が多数あった一方で、大川小学校ではなぜこんなことになったのか。この本は、在日20年の外国人記者が現地に通って犠牲者の遺族から話をきき、この日何が起きたのか、そしてその後遺族が（生き残った人々が）どのような日々を送ったのかをレポートしたノンフィクションである。

テレビに映った津波やがれきの映像のものすごさに気をとられ、生身の人間に起きたことを想像しえない（いや、想像しようとしなかったのかもかもしれない）自分がいた。この本を読んで、起きたことを目の前につきつけられた感じがした。事実に向き合おうとする家族に対し、逃げまくる学校関係者の姿は悲しい。家族の中でも、すべて失った親、子どもが生き残った親、遺体の回収ができない親など、様々な姿がある。日本人の死と生に対する姿勢を、外国人だからこそ聞きとり記録することができたのかもかもしれない。

なお、英語版の原作（Richard Lloyd Parry, 2017. *Ghosts of the Tsunami: Death and Life in Japan's Disaster Zone*, Jonathan Cape）がSALCにある。

## 祈り

ヴァジャ・プシャヴェラ 児島康宏訳  
富山房インターナショナル(2018年)

グルジア、今はジョージアと呼ばれる地。この地を舞台とした、伝承に基づく物語詩と短編からなる作品集。昨夏、たまたま神田で映画『ゲッペルスと私』を観た時、ジョージア映画特集の予告があった。そのうちの一作の原作が、映画館の隣の本屋（旧岩波書店）にあった。それが『祈り』である。3回も読み返した。石牟礼の世界に似ていたからである。19世紀末のもう1つのアルプス、コーカサス山脈の民の暮らしと祈り、そして闘い。チェチェン人の世界もここにあった。映画『祈り』も観に行ったが、すばらしかった（アブラゼ監督の他の2作もすごかった）。興奮のあまりトルストイのコーカサスもの（19世紀半ば頃に書かれた）まで手を付けるはめに……。楽しい夏のひとときだった。

## 海うそ

梨木香歩  
岩波現代文庫(2018年)

読み始めてすぐに、宮本常一の『忘れられた日本人』を思い出した。そして、作品の舞台は対馬だと勝手に思い込んで読んでいた本。主人公は人文地理学を専攻する青年。第二次大戦前に「遅島」を訪れた時の話しから始まる。それにしても梨木は地形、植物相を精緻に書き込む作家だ。だから後半まで対馬のような実在の島をモデルにしていると思った次第。この作品では民俗史的な知見の深さも知らされた。今も「遅島」の風景がいろいろと思い浮かぶ。架空の島なのに。なぜか対馬への憧憬が一層強まった。とにもかくにも面白かった。

# 世界で最も乾いた土地—北部チリ、作家が辿る砂漠の記憶 (ナショナルジオグラフィック・ディレクションズ)

アリエル・ドーフマン 水谷八也訳  
早川書房(2005年)

ぼーっとしたい時、ただ眺めるように読書したい時に手に取っていた本。ロードムービーを観ている感覚だった。チリの911により亡命したドーフマンが故郷に戻り、若き日々の記憶をたどって妻や旧友と砂漠を彷徨する。17年に及びピノチェト独裁下で詩を書き始めた鉱山労働者との出会い、ゴーストタウンから説きおこされるチリの銀・硝石・銅の物語、そして世界で最も乾燥したアタカマ砂漠とアンデス高山の先住民……。数年前にグスマン監督の映画『光のノスタルジア』を観たとき、この本が原作ではないかと思った。最近も新作を出し、米国(現在の居住国)では代表作の戯曲『死と乙女』も本屋に並んでいる。翻訳もいくつかあるが、どれも入手しづらいので英語版がお勧め。彼の書くものはとにかく素晴らしい。

## ただの文士

堀田百合子  
岩波書店(2018年)

堀田百合子は作家堀田善衛の一人娘。こういう本を待ち望んでいた。文章もすばらしく本当にありがたかった。2018年は堀田善衛没後二〇年、生誕百年の年だった。『インドで考えたこと』が復刊され、富山市や伏木では秋から冬にかけて、たくさんの企画展、講演会(百合子さんも登壇)が開催されたが、どれにも行けなかった。ストレスがたまっていただけに、この本に救われた(池澤夏樹らの『堀田善衛を読む』が面白くなかった)。特に武田泰淳の短編『審判』と堀田の長編『審判』に関する百合子さんの思い出話がうれしかった。また、堀田が逗子で林京子と交流していたことにも驚嘆した。林の本には一度も堀田の名前は出てこない。本書では水上勉の話しも出てきた。今年は、水上の生誕百年。福井での企画、逃したくないが……。

# 夜の森（堀田善衛全集 2 所収）

堀田善衛  
筑摩書房(1955年)

「お主、過激じゃのう」。大学時代、友人とじゃれあうなかで交わしていた言葉。この言葉が、大正7年秋にシベリアへ出兵した主人公、巢山一等兵の日記を通じて紹介されるとは。何と、大正時代に流行した言葉を知らずに使っていたのだ。解説によるとボリシェビキを過激派と訳したのがきっかけだという。本が出た1950年代前半、シベリア出兵の実相はよく知られていなかっただけに、衝撃的な本として受け止められたのではないか。郷里の米騒動を心配しながらチェコ兵の保護という名目で出兵した兵士たち。ユタフの山岳地帯での戦闘、枯れ野が広がる大地が印象的だった。蛇足だが、昨年読んだ水上勉の「はなれ瞽女おりん」も出兵と米騒動のあった大正7年の話だったと思う（舞台の一つが隠れキリシタンの里、十日町の松之山だったような気がする）。

## 一週間

井上ひさし  
新潮文庫(2013年)

「満洲」を舞台にした戦前から戦後の時空間をこんな風に面白おかしく書けるのは、後にも先にも井上さんしかいないのではと思う。学生時代、井上さんの演劇（こまつ座）の舞台設営バイトで何度か近くから姿をお見かけする機会があった。びっしりとみみずのような字でいっぱいの手帳。メモ魔だった。そして、度重なる脚本の遅れと公演の延期。支配人だった最初の奥様と別れる頃だった（後にエッセイスト米原万里の妹と再婚する）。近頃、当時を思いだすのか、井上ひさしの本に手が伸び始めている（ノーマ・フィールドも近刊の岩波ブックレット「いま、〈平和〉を本気で語るには」で3.11前年に亡くなった井上を思いだしていた）。マンザナの日系収容所を描いた戯曲は今ひとつだったが、この本はすごかった。なぜ知らない時代の知らない場所をこんな風にかけるのだろうか。不思議でならない。

# 猟銃・愛についてのデッサン (野呂邦暢小説集成 6)

野呂邦暢  
文遊社(2016年)

「愛についてのデッサン」に心を奪われた。古本屋を営む主人公が、稀覯書を探し求めて地方へ向かう。探偵ミステリー仕立てで頁をめくるのが楽しくてしかたなかった。野呂は長崎県の諫早で生まれ育った作家。干拓で海が変容することを危惧し続けた作家だが、工事の前に42歳で天逝。諫早湾の水辺を描く作品が有名だが、歴史小説『諫早菖蒲日記』、ガダルカナル戦記の傑作「丘の火」、諫早の8月9日を描いた「藁と火」など、忘れられない作品が多い。元自衛隊員でもある。林京子が芥川賞を取ってすぐにインタビューにかけつけたのが、7歳年下で2年先に芥川賞を取っていた野呂だった。静かな語り口、でも芯のある書きっぷり、愛すべき作家だ。

## 紀州 木の国・根の国物語

中上健次  
角川文庫(2009年)

読みながら、毒が身中を駆けめぐり感覚を覚えた本。この本は危険だ。昨夏、和歌山で学会があり、学会前日の夜から読み始めてしまう。徹夜してしまい、朝に飛行機で大阪へ向かい、空港レンタカーで熊野の山中に到着。説経節「小栗判官」ゆかりの温泉に入り、本宮、新宮、枯木灘をめぐって南紀白浜のホテルにたどり着いた。居眠り運転をしかけたが、この本のせいである。中上の母の故郷、古座(こざ)という海沿いの集落が忘れられない。第五福竜丸を建造した町だった。学会の翌日、太地町で鯨ショーを見に行ったのも、この本のせいだった。帰宅後、黒川創の『西村伊作伝』、佐藤春夫の『わんぱく時代』、そして谷崎の『吉野葛』などを読み継ぐことになったのも、このすごい本のせいだった。

# みな、やっとの思いで坂をのぼる 水俣病患者相談のいま

永野三智  
ころから(2018年)

21世紀に出された本の中で最も素晴らしい、とつぶやきながら読んだ本。水俣関連の本の中で、という意味だけではなかった気もする。赤羽にある大好きな出版社「ころから」の本だ。三智（みち）さん、水俣の相思社で働く30代半ばくらいの方で、フィールドワークでお世話になっている。本の仕掛け人、京都の古本屋「カライモブックス」の奥田さんから、三智さんの連載を収録する冊子を送って頂いていた。しかし、まとめ読みするまでこれほどの書き手だとは知らなかった、面食らった。普及版を読みながら特装版も慌てて発注。本には数年前、水俣で会ったと覚しき人も登場。滞在先にぶらりとやって来て、到着するなり私たちに喝を入れたばあちゃん。怖くてみんな正座したっけ。水俣病を知りたければこれを読めばいいのだ。

# ある台湾知識人の悲劇 中国と日本のはざま で 葉盛吉伝

楊威理  
岩波同時代ライブラリー(1993年)

楊威理は戦前、仙台で暮らした台湾留学生。植民地下の台湾では、日本語以外話せないことが台湾人青年の間でステータスだったという。本書で楊は仙台時代の盟友、葉盛吉が歩んだ人生をたどっていく。戦後、台湾に戻った葉と中国に渡った楊。初々しく、血気盛んだった仙台時代から、2人の運命は大きく分岐していく。葉を待ち受ける悲劇に肝がつぶれた。作者の楊も数奇な運命をたどる。戦後40年以上経ってから、旧宗主国たる日本に戻ったのだ。晩年を新潟で過ごしている（柏崎の産業大で教えていた）。台湾に戻る灣生の日本人もいれば、その逆もあるということか。人と場所の関係は何と奇妙なことかと思う。2年程前、葉の伝記がようやく台湾で出版された。昨秋に訪れた台北で購入するつもりだったが、本屋に行く時間がなかった。

# 自転車泥棒

呉明益 天野健太郎訳  
文藝春秋(2018年)

昨秋、台湾の学会で『自転車泥棒』(英語版)のラウンドテーブルがあり、読み始めた。自転車の世界史についてこれほど熱く語る本に出会ったことがなかったし、自転車から日台関係史を知りうるとは考えもしなかった。医者の子だった佐藤春夫が幼少期、自転車に乗れるうれしさを書いていたが、今は大正時代ではない。でも台湾では今も自転車を大切に考える人がいるのだ(台湾に世界的な自転車の企業があることも今回知った)。その驚愕の理由が、本書で書かれることになる。滞在中、国立博物館ではこの本に関連した自転車の展覧会が行われていた(時間がなくて行けなかったが)。それにしても台湾のこと、知らないことばかり。台中も激しい米軍の空襲に遭っていたこと、日本人による台中での蝶の収集が奇異な運命をたどったこと、など。昨年11月に翻訳が出版されたが、翻訳者の天野健太郎さん、出版直後に47歳で急死した。ライフヒストリー『台湾海峡一九四九』の翻訳も素晴らしかったのに。

# 軍旗はためく下に

結城昌治  
中央文庫(2006年)

万引きを描いた名作『白昼堂々』(渥美清・倍賞千恵子主演で映画化もされた)で知られる結城昌治(しょうじ)。ずっとこの本を読みたいと思っていた。数年前に池袋新文芸坐で本作が原作の映画がリバイバル上映され、ロングランになっていたからだ。衝撃的な内容だった。旧軍人が次々と登場し、その戦中戦後を追いかける。彼らも元は農家の次男、母親思いの料理人、結婚したばかりの文学好きの男など普通の人々だった。兵士として戦場に向かうと・・・そのリアリティに息をのんだ。私の中で結城昌治は梶山季之、邱永漢らと同じ類いで、軽やかにずっしりと重いものを書く作家だ。

## 樹影

佐多稲子

講談社文芸文庫(1988年)

読み通すのに時間がかかったが、読んでよかった。長崎にある中華街の情景がすばらしい。華僑の若い被爆女性が主人公。妻子ある青年画家と密通していくなかで、敗戦から20年ほどの長崎が露わになっていく。佐多が11歳まで暮らした故郷だが、彼女は戦前に離郷していた（佐多は1950年に25年ぶりで長崎を訪れたという）。長崎チャンポンを食べたことのある「新地」が舞台。中国・台湾系文化の漂う街だ。印象深いのが第2回原水禁の場面。中国の核実験をめぐる革新系と北京系華僑との溝が深まっていく経緯など、まったく知らなかった。佐多はプロレタリア文学の古典「キャラメル工場」などしか読んでいなかった。晩年に出版した『私の長崎地図』もいつか読みたい。

## 密航定期便

中園英助

講談社(1996年)

中園英助はサスペンスやミステリーを得意とし、GHQの内部に精通した作家。戦後は中国へ渡り、短編集も出している。最近、GHQ秘史の本が復刊された。占領下で活躍したカナダ人外交官で歴史家のハーバート・ノーマンを描いた『オリンボスの柱の蔭に』も面白かった。『密航定期便』は対馬という朝鮮海峡に浮かぶ島で起こった事件を解明していく小説。対馬は済州島や房総半島、能登と同じく海女が集まる場所だった。かつて、大阪の鶴橋から対馬へ出稼ぎにきた海女さんを描く映画『海女のリャンさん』を見て、衝撃を受けたことがある。地図を見ながら本を読み進めた。在日文学でもよく登場する対馬だが、何という歴史が刻まれた島だろうと本を読んで改めて感服。訪れる機会はやって来るのだろうか。

## 第四間氷期

安部公房  
新潮文庫(1970年)

AI、人工授精、地球温暖化・・・1959年の小説だ。日本最初のSF小説とも言われるのも頷ける。オーウェルの『1984』よりもプロット展開は面白い。20数年後、お台場となる12号埋立地など、戦後作家が関心を寄せた「夢の島」周辺もこの時既に描いている。後半に出てくるベルクソンのような予見不可能性のくだりや、未来に対する現在という時間の罪性を述べていく展開も印象的だ。そういえば『模範郷』でリービ英雄が安部公房を絶賛していた。ドナルド・キーンもそうだし、欧米出身者に愛される作家なのだ。

## 増補 遙かなる故郷 ライと朝鮮の文学

村松武司  
皓星社(2019年)

半世紀前、村松は草津にある栗生楽泉園で大江満雄の後を継ぎ、詩の創作指導を始めた。その頃から70年代後半までに書かれたエッセイや評論からなる本。1979年初版本の再刊だが、韓国小説の翻訳家、斎藤真理子（皓星社では「中くらの友だち」という雑誌に関わっている）が解説を付している。彼の本が再刊されるとは、とにかくも画期的なことだ。朝鮮半島の引き揚げ者だった村松は、ずっと植民者だった自己を変わりゆく日本社会でどう位置づけるべきか悩み続けた。その中で当然の如く、ハンセン病とも関わっていく。本書に登場する詩人、歌人たちのすべてがもう鬼籍に入った。それなのに、今も村松の言葉は新鮮に響く。良いことなのだろうか。

## 考える日本史

本郷和人  
河出新書

「歴史は暗記科目じゃない！」と授業では常々言ってきたんですが、なかなか分かってもらえなくて苦労してました。暗記って、そもそも何を暗記するんですか？ 事件？ 年号？ そんなの暗記しても、どうしてその時代にそういうことがそういう風に起こったのか、それが次の時代にどのようにつながっているのかわからないと、意味ないでしょ？ だから、考えないといけないんです。歴史は、(1) その時代の主要な生産物を、誰がどんな風に作っていたのか(=経済)、(2) その収入を誰がどんな風にピンハネしていたのか(=税制)、(3) ピンハネされて怒ってる生産者をどんなふうに締め付けたのか(=軍事組織)、これだけわかっていたら、すべてが理解できます。要するに、カネと権力です。たとえば、教科書には、「奈良時代の末期には班田収授の法が機能しなくなって、各地に荘園ができました」と書いてあります。でも、班田収授の法が機能しなくなれば税金は入ってこないから、どうやって朝廷は日本を統治していたんだ？ ところが、そんなこと日本史の教科書には書いてありません。そこで考えるのです。実は「平安時代に日本で最大の荘園領主は朝廷でした」、というわけです。これで、税金が入ってこなくても問題はなくなるけれど、各地の国衙は機能しなくなります。○○の守なんていう官職名もただの名誉称号になってしまいます。でも、この流れの最大の帰結は、「平安時代には日本には国家は存在しなかった」というものです。これ、教科書に書いてはまずいですよね。つまり、教科書にはウソが書いてあるという次第。以上は、私が考える「日本史」でした。本郷さんのこの本は、事実を資料で示しながら、いろいろな角度から「なぜ？」に突っ込みを入れます。大変面白いです。以前読んで目からうろこが落ちた歴史の本に、笠松宏至さんの『徳政令——中世の法と慣習』(岩波新書)と、五味文彦さんの『絵巻で読む中世』(ちくま新書)という本がありましたが、本郷さんに言わせると、このお二人は天才で、本郷さんはこの二人の天才のお弟子なんだそうです。どうりで面白いわけです。

# 高野聖・眉かくしの霊

泉鏡花  
岩波文庫

高野山の坊さんが飛騨の山中で魔性の女性の色香に迷って、あわや獣にされる  
ところでした……というお話なのですが、最近読み返して気づいたことがあります。  
以前は、「仏道修行には女性は邪魔だ」というお説教をする、女性蔑視の小説  
だと思っていたのですが、よく読むと、この坊さん、主人公の女性を性的に見て  
はいないのですね。彼女に対してよこしまな思いを抱いて、いけない行為に及ん  
だ男たちは、魔力によって獣に変えられてしまうのだけれど、それというのも、  
知的障害をもった同居人を守るために、この女性が超常的な能力を獲得してしま  
ったからなのだ、というわけです。告発されているのは、女性の方ではなくて、  
非道なふるまいをする男性の方です。彼女の世話をしている馬喰の老人もそれを  
わかっているし、そもそもこの坊さんが獣に変身させられていないのも、そうい  
うよこしまな思いを抱いて悪行に及んだりはしなかったからでした。これは久々  
の大発見でしたね。やはり、古典は熟読すべきものです。何より、泉鏡花の文章  
は幻想的で流麗です。一読をお勧めします。

## センネン画報 + 10Years

今日マチ子  
太田出版(43221)

2008年に最初の巻が、2010年に『センネン画報 その2』が出版された伝説  
の『センネン画報』が、発表10年目に戻ってきました。吹き出しなしの1頁マ  
ンガ集です。多くの未収録作品と既発表の作品を再編集しています。10年前の巻  
では最初の何ページかだけカラーで、あとは白黒でしたが、今回は前頁カラーで  
す。高校生の恋のような友情のような、曰く言い難い気持ちがあふれています。  
もう〇十年も前の高校生の頃を思い出して、ウルウルしてしまいました。学生の  
皆さんには、せいぜい数年前のことだと思っけれど、それでもウルウルすること  
間違いなしです。

# 銭湯と横浜

横浜開港資料館・横浜市歴史博物館（編）  
公益財団法人 横浜市ふるさと財団

ちょうど一年前の今頃（2018年1月31日～4月22日）、横浜開港資料館と横浜市歴史博物館の共催で行われていた「銭湯と横浜」という企画展の図録です。横浜の、江戸末期から昭和30年代に至る銭湯の歴史が展示されていました。お花見がてら、横浜の三溪園に出かけたついでに立ち寄ったのでした。東京・川崎・横浜の京浜地域の銭湯は、他の地方の銭湯とはかなり違った特徴を持っています。お寺のような大きな入母屋破風の建物の妻側に千鳥破風と唐破風を組み合わせた豪華な玄関がある銭湯は、東京出身のある程度の年齢の人たちにはなじみ深いものですが、この建築様式は関東大震災後の東京とその近郊に出現して発展したもので、ほかの地方には存在しません。カラフルなマヨルカ・タイルを敷き詰めた京都や大阪の銭湯とはまるで違います。それで、関東出身の宮崎駿さんは『千と千尋の神隠し』の舞台になる湯屋に、あのような様式の建物を描いて見せたのですね。モデルになった銭湯は、今、小金井市にある江戸東京建物博物館という野外博物館に移築されてます。それから、東京の銭湯の経営者は大半が新潟と福島の出身者なのだというのも、興味深いですね。冬には出稼ぎをしなくてはならなかった越後の人たちは、それでも人口が多すぎて、次男坊以下は国を出て都会に流れていきました。そうした人たちの中に、銭湯で成功した人々がいて、この人々が身元引受人になって、郷里の若い人たちの世話をしたのでした。これが、東京に新潟出身者の経営する銭湯が多かった理由です。

この図録の中でも特に面白い図版は、ペリー艦隊の従軍画家の手になる東京の銭湯を描いた挿絵です。アメリカ議会への日本遠征報告書に掲載されたこの絵は、不道德だという理由で、報告書の第二版以降からは削除されています。なんで不道德なのかというと、江戸末期の銭湯の常で、普通に混浴なのです。これがキリスト教の倫理に反する、というわけです。しかし、当時の日本ではこれが当たり前で、それだからと言って性道徳が乱れたわけでもなんでもなかったのです。先日亡くなった作家の橋本治さんが書いてたけれど、日本には性のタブーはないけれど性のモラルはちゃんとあった、ということでしょう。

それから、東急東横線の沿線に綱島という本当の温泉地があったのも、忘れてはいけません。今は単なるベッドタウンですがね。ここの温泉がなくなったのは、第二次大戦と関係してます。面白い図録ですよ。

## 高坂正堯－戦後日本の現実主義－

服部隆二

中公新書(2018年)

1,000円(税別)

現在の国際社会に対する捉え方には様々な考え方(理論)があります。国際関係には「現実主義」と「理想主義」と呼ばれる2つの立場が存在します。両者は「悲観性」と「楽観性」、「現状志向」と「未来志向」等その性格や視点において大きな特徴があります。

戦後の国際政治学界において今日でも語り草となっている見解の応酬がありました。いわゆる<高坂・坂本論争>です。その論争とは当時の国際社会の平和や日本の外交理念をめぐる学問上のリアリズム対リベラリズムの論議でした。本書は戦後を代表する国際政治学者で「リアリズム」を説いた碩学、高坂正堯の評伝です。高坂は自民党政権のブレーンの一人であったと言われていますがその見方は単純に過ぎます。論壇では学者の本分として「現実主義者と理想主義者は出会うところがある」と常に対話を求めた姿勢、「国家が追及すべき価値の問題を考慮しないならば、現実主義は現実追随主義に陥るか、もしくはシニシズムに墮する危険がある」という高坂の主張の心髄は今日でも決して色褪せぬ警句です。国際社会に広く蔓延する自国第一主義的傾向や日本の政界に瀰漫する政治的責任感覚の麻痺など混迷する時代状況を読み解く鍵が高坂の半生の随所から汲み取れるからです。

実は今年度の卒業研究で高坂正堯を論じたテーマが挙げられていました。専門的知識や素養を持たない新生にはかなり難しい内容かもしれませんが、どうか勇気をもって本書に挑戦してみてください。余談ですが京都で過ごした学生時代、私は京都大学法学部の聴講生試験を受け、国際政治学の講義を受講し、高坂正堯教授の警咳に接する機会に恵まれました。今でも青春を過ごした京都時代の良き思い出となっています。

補足： 高坂正堯教授の論争相手だった東京大学法学部の坂本義和教授の回想録も併せて推薦いたします。是非こちらも読んでみてください。

坂本義和『人間と国家－ある政治学徒の回想(上)(下)』岩波新書、2011年刊行。 定価 各800円(税別)

## 九月、東京の路上で：1923年関東大震災、ジェノサイドの残響

加藤直樹

ころから(2014年)

1800円＋税

この一年は公務多忙で、私的読書がほとんどできなかったもので、例外的に研究活動のなかで出会った本を紹介することにしました。この本に出会ったのは、「出版と平和」をテーマにした研究会でした。その研究会に一人で「ころから」という出版社をやっているパブリッシャーの木瀬さんが来ていて、そのとき彼が持参した本のなかの一冊がこの本でした。タイトル、装丁、そして本の帯に記されていた詩人萩原朔太郎の言葉に心打たれて即決で購入し、研究会が終わった後、そのままバーに立ち寄り、ウイスキー片手に一気に最後まで読みふけてしまいました。

そんな読書体験はじつに久しぶりでした。ぜひ皆さんもこの本を手にとり、この本のリアリティとアクチュアリティを体感してみてください。そうすれば、1923年9月の東京の路上が1947年2月の台北の街頭に、あるいは1994年4月のルワンダの町や村に、そして2013年の新大久保のストリートに、世界中の至る所で繰り返されてきた惨劇やその予感にダイレクトにつながっていることが実感できます。

朝鮮人あまた殺され  
その血百里の間に連なれり  
われ怒りて視る、  
何の残虐ぞ

萩原朔太郎

## 地球にちりばめられて

多和田葉子  
講談社(2018)

「実験的な」小説はどちらかというと苦手ですが、多和田葉子という作家は、物語や人物像で読者を引き込みつつ、実験を巧妙に「ちりばめる」ことができる人です。日本で暮らしながら外国語を学んでいる者にとって、「異国で母語ではない言語を使いながら暮らしている日本人と偽日本人と外国人」を日本語で描いた小説は、刺激と納得に満ちていて、頭の中をぐいぐいとマッサージされている気分でした。こういう本を書いてくれる人がいて本当にしあわせです。

## 演劇入門

平田オリザ著  
講談社現代新書(1998年)

劇作家・演出家の平田オリザは、これまで、演劇ワークショップや講演活動、授業などを通じて教育や文化面でも幅広く活躍している。本書は、芸能の秘伝や奥義のように捉えられがちな演劇の技術や劇作術を具体的な作品やシーンを交えながら分かりやすく展開したものである。

1960～80年代の唐十郎や野田秀樹などの賑やかな非日常の演劇とは対照的に1990年代に出てきた演劇に「静かな演劇」と呼ばれる演劇スタイルがあるが、平田がその第一人者である。日常生活を写生したような舞台で、大きな事件もクライマックスもなく静かに舞台は始まり終わる。テーマとかイデオロギーを伴った伝統的な演劇に慣れた観客は不満さえも覚えるが、平田の演劇を見た観客は、舞台上の人々と場と時間を共有した感覚をもち、確かにそこに何かがあったと思うのだ。本書を読むことによって、このような現代劇をより理解できるようになるだろう。平田の演劇創作は「私（平田）に見えている世界を社会に向けて開示する」ことなのだ。

本書では、戯曲の書き方、俳優の演技とは何か、演出とは何か、リアルさを生み出す方法、などがわかりやすく解説されている。平田は「一人ひとりの言語の内容、一人ひとりが使う言語の範囲」を「コンテクスト」と呼んでいる。人のコミュニケーションは個々の「コンテクスト」の摺り合わせによる共通のコンテクストを創ることであると言う。演劇を創り観客に見せることは「舞台空間という限られた時間と場所で、表現者として、鑑賞者と何らかの形で一瞬でもコンテクストを共有」するための「内的対話」を積み重ねることである。共有される新しいコンテクストが生成された時の感覚こそがリアルなのだと言っている。

新書版ではあるが、内容の濃い一冊なので推薦したい。

## 15歳のコーヒー屋さん 発達障害のぼくができることから ぼくにしかできないことへ

岩野 響  
KADOKAWA

10歳でアスペルガー症候群と診断され、現在群馬県桐生市にあるコーヒーショップ「HORIZON LABO」の店主である岩野響さんの著書。ご両親へのインタビューや、精神科医の解説も掲載されていますので、当事者である響さんの目を通して見る世界はもとより、響さんを見守り支えるご両親の思い、専門家の見解などに知らず知らずに触れることとなります。いくつもの「できないこと」から、「できること」を捜すことで新しい世界が広がりました。

## わたしの日本語修行

ドナルド・キーン 河路由佳

本年2月24日にお亡くなりになった日本文学者ドナルド・キーン先生へのインタビューをまとめたもの。内容はフランス語などの外国語との出会いから始まり、漢字、日本語との出会い、海軍日本語学校での日本語修行と続く。テレビ番組や講演会などでは語られない内容も随所に見られます。海軍日本語学校での授業のすすめ方や教科書の詳しい内容など当時を知る貴重な資料となりうるものだと思います。

## The Handmaid's Tale (侍女の物語)

Margaret Atwood (マーガレット・アトウッド)

早川書房

ISBN-13: 978-4151200113

Margaret Atwood is one of Canada's most famous writers. The Handmaid's Tale is her most popular novel. It was written in 1985 but it has recently become very popular again. It is a science fiction story of a dystopian future in America. It has a very strong message about gender equality and the role of religion in life and politics. Many people think this story is similar to the current situation in America so the book has become popular again. Reading this book will make you think deeply about the relationship between men and women and the power of the government.

特集

# おとなになっても 読みたい絵本



イラスト 米山万里子

## 戦火のなかの子どもたち(創作絵本 14)

岩崎ちひろ  
岩崎書店(1973年)

去年購入した絵本2冊のうちの1冊。昔、信州松本にいた頃、「ちひろ美術館」を初めて見た。観光バスも来ていた大きな美術館だったので、私が好きではない美術館かなと思い、素通りして帰宅。このベトナム戦争時の絵本を読んで思った、立ち寄ればよかったと。

## 花ばあば

クオン・ユンドク  
桑畑優香訳  
ころから(2018年)

去年購入した絵本のもう1冊。昨春、70周年を迎えた済州島四三事件の追悼集会で購入。この絵本、十日町にある絵本作家、田島征三さんの「絵本と木の美の美術館」でも販売していた。従軍慰安婦の絵本で内容は心に突き刺さるが、絵が本当に素晴らしかった。

## みんなうんち（かがくのとも傑作集）

五味太郎  
福音館書店

私の師匠は臨済宗の禅坊主で、大学院の演習で「西洋近世哲学演習」と称して曹洞宗の開祖・道元禅師（宗派が微妙に違うけど）の『正法眼蔵』を読んでいたという破天荒な人でした。先生に言わせると、デリダも孔子も仏陀も言ってることはみな同じで、言い方が違うだけだから、「西洋近世哲学演習」でいいんだそうです。で、この先生の決め台詞が「人間は六尺糞袋」でした。偉そうにしてても、人間なんて六尺（=180 cm弱）の糞袋だ、という次第。禅問答では仏とは「乾屎橛（カンシケツ）」です。乾いた棒状のうんこ。万物に仏性が宿っているとする大乘仏教の本覚思想からすれば、当然、うんこにも、うんこをひり出してる人間にも動物にも、みな仏性があって、だから、仏もうんこです。仏がうんこなら人間は当然うんこで、人間が書いてる論文なんか、みんなうんこ。以前、卒研で四苦八苦しる学生に向かって、「どうせうんこなんだから、せめて形のあるうんこをひり出しなさいね」と言ったら、この学生、面白がってそこら中でこの話をしたようです。某先生からは「学問を冒とくするな」と叱られたとか。自分が書いてる論文がうんこだってという自覚は、額に汗して働きもせずに学問をやらせていたでいる人の最低限のモラルだと、私は、思うんですけどね（照顧脚下！！）。そういうわけで、五味太郎さんの『みんなうんち』です。「かがくのとも」という絵本シリーズの中の傑作です。「かがくのとも」ですから、生物学への手引き書でもあります。福音館書店も懐が広い。破天荒な禅坊主程度には広い！ 「大人になっても読みたい絵本」というより「大人が読まなくてははいけない絵本」かもしれません。心せよ！ みんなうんちだぞ！！

# 走れ ひばく電車

まさきかずみ（文）・しげとうさちよ（絵）  
ひろしま女性学研究所

1945年の8月6日。その日も広電の電車は街を走っていました。この絵本は、被爆した電車651号が戦争と原爆とその後の広島、そして自分のことを話して聞かせるという物語になっています。1945年に被爆した車両で今でも残っているのは、他に4両あります。150型の156号、651号の仲間で650型の652号と653号と654号です。156号はいまではめったに走りません。653号はイベントの際に時々走ります。654号は広島市交通科学館で保存されているので、もう動きません。でも、651号と652号は、今でも毎日広島の街を走っています。広島に行ったら探してみてください。この本は、広島市の平和記念資料館（原爆資料館とも言います）で買いました。

## めっきらもっきらどんどん

長谷川摂子 作 ふりやなな 画  
福音館書店

意味不明なこの言葉、響きがいいですね。文字では書けない言葉をよく発しながら、息子は遊んでいます。楽しい世界、不思議な世界への合い言葉。

## 11 ぴきのねこ

馬場のぼる  
こぐま社

欲望のままに生きる猫たちの姿がとってもわくわくさせてくれます。息子は「しっぽはいやだよ」というセリフがとても気に入っています。息子は、鯛焼きを食べるときに必ず、この台詞をいいます。でもうれしそうにしっぽを食べています。

# かわ

加古里子 さく／え  
福音館書店

山から海への流れる川の雄大さ。川に凝縮された自然、産業、くらしをみることが出来ます。ダム・発電所、支流の浅瀬で水遊びをする子どもたち、平野の青々とした稲、川で魚を捕る舟、材木を運ぶ舟、町の真ん中を流れる川、河口の浚渫船…いまある新潟の風景を感じることが出来ます。川とともに歩んできた新潟のいま。

# へいわってすてきだね

詩 安里有生 画 長谷川義史  
ブロンズ新社

小学校 1 年生の書いた詩が、絵本として読めます。「へいわっていいね、へいわってうれしいね」。この思いを受けとめ、考え、行動し、どう伝えていくか。へいわを次代につないでいくために。

# 花ばあば

クオン・ユンドク 絵／文

桑畑優香 訳

ころから（株）

証言をもとに、その経験した痛みが描かれています。日本軍「慰安婦」としてどう連行され、どんな日々を送っていたのか、そして戦後の暮らし。慰安所の利用日割り当て表、性病検査、そして慰安所に並ぶ長い兵士の列。目を向けなければいけない事実がここにあります。さらに、この被害がいまなお続いていることを伝えています。

## まあちゃんのながいかみ

たかどの ほうこ さく  
福音館書店

まず表紙に出てくるまあちゃんのながい髪。どんな長い髪のまあちゃんかと思いきや。大人にとって、長すぎる髪は魅力的な部分もありますが、時に不便なこともあります。子どもの発想力に心躍らされる作品です。

## 中国の民話 王さまと九人のきょうだい

赤羽末吉絵  
君島久子訳  
岩波書店

配本サービス「おはなしちょうだい」でこれまでたくさんの絵本に出会ってきましたが、その中でも特に印象に残った1冊。子どものいない老夫婦が「子どもがほしい」と泣いていたところに、老人がやってきて、子どもが生まれる丸薬を9粒くれます。さっそく1粒のんでみても、なかなか子どもができません。たまりかねたおばあさんが、一気に9粒の丸薬を飲むと…。個性豊かな9人きょうだいがみせる姿にわくわくドキドキする作品です。

## はなのすきなうし

おはなし マンロー・リーフ え ロバート・ローソン  
やく 光吉夏弥  
岩波の子どもの本 岩波書店

娘の愛読書。「好きな絵本は？」と聞くと、必ずこれが返ってきます。子牛のフェルジナンドは他の子牛たちと違って、お気に入りの場所で静かに花のにおいをかいているのが好き。その姿に心配したお母さん牛が、どうしてほかの子牛たちと遊ばないのかと聞いたところ、フェルジナンドは、こうして過ごしている方が好きなんだと答えます。その返事を聞いたお母さん牛は、「うしとは いうものの、よく ものの わかった おかあさん」だったので、好きなようにさせることにしました。さて、そんなフェルジナンドがある出来事に巻き込まれていきますが…。娘はマイペースなフェルジナンドが好きとのことですが、「ものが よくわかっていない」おかあさんである私は…笑。

## 美女と野獣

ローズマリー・ハリス さいわ エロール・ル・カイン え  
やがわすみこ やく  
ほるぷ書店

これは書店で手に入れたもの。絵のリアルと美しさに惹かれて購入。絵の細かさだけでなく、字面の枠もきれいな額縁に納められたような体裁。ストーリーも、某映画とは違って、リアルで怖い（笑）。同社から出版されているエロール・ル・カイン絵による「いばらひめ」も愛読書でした。

# いっさいはん

さく・え minchi (みんち)  
岩波書店

テーマ「大人になっても読みたい絵本」ではなく、「子育てをした人が読んだらあるある」の絵本です。学生さんは、いつか子育てをすることがあったら、「あるある」を実感すること間違いなし。今、大人のわたしたちは、みんなこんな「いっさいはん」があったこと、そして育ててくれた人がいたことに感謝。

## あおくときいろちゃん

レオ・レオーニ作 藤田圭雄訳

色紙を手で丸くちぎったような、絵の具を垂らしただけのような、そんなシンブルなイラストだけでお話が進行します。出だしが好きです。青い丸っちいものがぼつんと真ん中にあるだけのページに「あおくんです」とあります。原作の英語では“*This is little blue.*”このひとつの文で、この単純なかたちが、ひとつの色が、命を与えられて動き出す感じです。

《あおくん》には《きいろちゃん》という親友がいます。この絵本はその2つ（2匹？）の話。この絵本は子ども頃から好きだったのですが、大人になったある日、同じくこの絵本が好きだという友人と議論になりました。「あおくんは男の子で、きいろちゃんは女の子？」すぐに英語版で確かめますが、《あおくん》は“*little blue*”、《きいろちゃん》は“*little yellow*”で分からない。でも読み進めていくと、“*little blue*”を *he* で受けているのを発見！男の子だ！じゃあ“*little yellow*”は？う～ん、代名詞は出てこない…。レオ・レオーニはオランダ出身の作家だよ。オランダ語では、“*Blauwtje en geeltje*”。でも、オランダ語って男性名詞と女性名詞の区別はなくなってるよ。えーそうなのー！レオ・レオーニはイタリアにも住んでいて、スイスの大学を出たらしい。イタリア語には男性名詞と女性名詞があるね。イタリア語の訳は、“*Piccolo blu e piccolo giallo*”。両方とも男性形だ！ドイツ語は？ドイツ語は、“*Das kleine Blau und das kleine Gelb*”。*das* って中性やん！でも、ドイツ語で *Kind* 「子ども」は中性名詞だよ。おー！ということは、とにかく日本語以外では、少なくとも“*little blue*”と“*little yellow*”の性別の違いを感じさせるものはないみたい。じゃあ、日本語に訳すとき、なんで《きいろちゃん》ってしたんだろう？《あおくん》と《きいろくん》だと、女の子が感情移入しにくいからかも？もしそうなら《あおちゃん》と《きいろちゃん》でもよかったのに。大阪やと《あおやん》と《きいやん》やね。京都やったら《あおはん》と《おきいはん》。京阪電車の人？それは《おけいはん》。って新潟の人は誰も知らんがな。

# エスターハージー王子の冒険

イレーネ・ディーシェ&ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー著  
ミヒャエル・ゾーヴァ絵  
那須田淳&木本栄共訳

ドイツの社会派詩人ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーが手掛けた童話。エスターハージー家は、オーストリアでは有名なウサギの貴族。その一族の王子（もちろんウサギ）が、姫を探しにベルリンに旅立ちます。旅立つといっても、舞台はベルリンの壁崩壊直前のドイツの街。移動手段は列車。大きな座席にちょこんと座るウサギの姿は、シュールなのにどこかリアルでとても雰囲気があります。このお話の独特な世界観を作り出しているのは、ミヒャエル・ゾーヴァの挿絵です。いや、挿絵というより、ひとつひとつがテーマのある絵画作品になっています。ミヒャエル・ゾーヴァも、社会派とっていい画家。動物を題材にしたときに風刺を交え、映画のワンシーンのように描き込まれた彼の絵にはいつも引き込まれます。おまけに描かれている動物はみな存在感があってかわいい。片腕を三角巾でつるしてこちらを見ているネコ。電線にとまったブタ。街角を通り過ぎる巨大なカタツムリ。ゾーヴァの世界に触れたいなら、画集『ゾーヴァの箱舟』がおすすめです。

## マトリョーシカちゃん

ヴェ・ヴィクトロフ/イ・ベロポーリスカヤ 原作  
加古 里子 文・絵  
福音館書店

マトリョーシカを開けると中からお人形が出てくる。そんな「当たり前」のことがシュールに思えてきます。ロシアで生まれた本ですが、絵も文も加古里子さんが書き（描き）なおされたようです。原作と読み比べてみたいです。

## もみのき そのみを かざりなさい

五味太郎  
リプロポート(1981) (文化出版局より再版あり)

五味太郎さんの本にはハズレがありませんが、この絵本は少し「らしくない」かもしれません。2ページに1枚の絵、そこに添えられたとても簡潔な言葉は、一つ一つが、開くと長い物語につながってゆく窓のようで、いつまでも眺めていられそうです。

# 100 まんびきのねこ

ワンダ・ガアグ  
いしいももこ やく  
福音館書店(1961)

大人になって、本を自由に見えるようになってから、最初買った絵本がこれです。子どもの頃には、選ばれなかった猫たちのことはあまり気にならず、1匹の猫が幸せになったことを喜んでいました。いま読み返してみると、死んでしまった（と推測される）100万匹の猫たちの悲慘に胸が痛みますが、きっとどちらの読み方も大切なのだらうと思います。

# クレーの天使

谷川俊太郎 パウル・クレー  
講談社(2000)

こういう絵本を楽しむためなら、大人になるのも悪くない—そう思えるような珠玉の一冊。クレー自身も、自分の絵に添えられた詩や、詩と絵との絶妙な響きあいを味わうことができたら、どれほど喜んだことでしょうかね。

## 今日

下田昌克 画  
伊藤比呂美 訳  
福音館書店(2013)

「おとなになっても読みたい絵本」というよりは「おとなになったら読みたい絵本」「親になったら読みたい絵本」といった方が正しいかもしれません。

今日は朝から赤ちゃんの機嫌が悪い。洗濯機は「ピーピー（終わったよ〜）！」鳴っているけれど、洗い物は流しの中にたまっているけれど、でも抱っこしてないと泣くし、寝たと思って布団に下ろすと背中スイッチオン…でまた泣き出すし…おむつを替えて、抱っこして、おっぱい飲ませて…気がついたらもう夕方…。そんな日を過ごすお母さんお父さんたちは、よく、「今日も一日何もしなかった（できなかった）」とおっしゃいます。でもね、おむつ気持ち悪いよ替えて！抱っこして！おなかすいたよ！…と発信するのは赤ちゃんのとても大切なお仕事。発達心理学の観点からいうと、その要求に応じてくれる人がいることは、子どもの心が育まれることにつながるのです。だから、そんなお母さんお父さんには、こう伝えたい。何もしなかったんじゃなくて、一日中赤ちゃんの心を育てていたんだよ、と。

そんな気持ちでめくってほしい1冊が、この、ニュージーランドの子育て支援施設に伝わる詩 Today。いつの日か、そんな日常が来たら思い出してほしい。いつの日か、子育てで疲れている人に出会ったら、そっと差し出してあげてほしい1冊です。

## おやすみなさいのほん

マーガレット・ワイズ・ブラウン ぶん シャン・シャロー え  
いしいももこ やく 福音館書店（2才～5才むけ）

原作の出版は1943年なので絵はみな古めかしい感じですが、でもことばは時代を感じさせません。昼間さえずり飛び回っていたことりたちがねむります。さかな、ひつじ、もりのけものたちもみなねむくなります。いきものだけではありません。えんじんとまっただじどうしゃ、とらつく、ひこうきも。そしてこどもたちも。おはなしを聞きながら少しずつねむくなる準備をします。途中であくびでもしたら大成功。でも子供が早く眠くなるように一生懸命催眠術をかけているようにも思えてきます。「よるになります。なにもかも みな ねむります。」、そう願いながら読むこともあるかもしれません。

## フォックスウッドものがたり4 ひみつがいっぱい

シンシア&ブライアン・パターソン 作・絵  
三木卓訳 金の星社

フォックスウッドにすむ、ハリネズミのウィリー、ウサギのルー、ハツカネズミのハーベイのなかよし3にんぐみが繰り広げる冒険シリーズ。フォックスウッドを走っていた鉄道が動かなくなってしまった。そりあそびをしていた3にんは、はやめにきりあげ家に向かってとぼとぼ歩いて帰らなければなりません。鉄道がとまってしまったのは、あばれもののクマネズミのせいだろうとルーは考えます。そんなとき発明家のヘンリーおじさんからの手紙がルーに届きます。「すごいはっけんをした」という内容ですが、どんな発見かは書いてありません。3にんはどうしても知りたくて、近道をするために暗く気味が悪い森に足を踏み入れます。小枝が折れる音とともに目の前に現れたのは5にんのクマネズミたちです。3にんは大発見をしたヘンリーおじさんの家に無事にたどり着けるのでしょうか・・・

# わすれられないおくりもの

スーザン・バーレイ さく え  
小川仁央 やく 評論社

まわりのだれからも慕われている年老いたアナグマは、自分の死が近いことを知っていました。でも死ぬことを怖いとは思っていません。気がかりなのは後に残していく友だちのこと。自分がいつか、長いトンネルのむこうに行ってしまう、あまり悲しまないようにと、みんなにっていました。ある日アナグマはふしぎな、すばらしい夢をみました。翌朝キツネが悲しい知らせをみんなに伝えます。「長いトンネルの むこうに行くよ さようなら アナグマより」、みんなにあてた最後の手紙でした。悲しまないようにといわれてましたが、森のみんなにとってそれはとてもむずかしいことでした。かけがえのない友を失った悲しみを、どうのりこえていくのでしょうか・・・

ことばのからくり全四冊セット：

『ぼくらは赤いうたうさぎ』

『おとうさんはまんねんひつ』

『パジャマおばけのおばけパジャマ』

『つかまったのはだれ？』

文 大津由紀雄 絵 藤枝リュウジ

4冊セットでの販売でしたので、試しにどれか一冊買う、ということではできませんでした。結構な値段でしたが、著名な言語学者が絵本を出版した、ということを知りつけて買い求めました。ことばの面白い性質を扱った、さながらことばの実験室のような絵本です。言語学でいう多義性、うなげ文、内心構造、埋め込み文などが各巻のテーマとなっていて、異色の絵本と言えるかもしれません。そのためおもしろがる子もいれば、これ何？絵本？といぶかる子もいるでしょう。万人向けとはいえないでしょう。我が家で初めて読んで聞かせたときには、どう反応して良いのかわからないという困惑の表情が見て取れました。記憶に残る絵本です。

## 花さき山

斎藤隆介・作 滝平二郎・絵  
岩崎書店(1969年初版)

この物語との最初の出会いは、「絵本」ではなく大きなスクリーンに映された「影絵」でした。滝平二郎によって描かれた、切り絵のような黒と白を基調とした画面に、赤や青や黄色などの鮮やかな色彩が浮かんだり消えたりする美しさや儚さは、現在でも脳裏に焼き付いています。幼い時の絵本とのかかわりは、物語の内容よりこうしたイメージとしてより記憶されるようにも思えます。

おとなになり、再び『花さき山』を読んだ時は、「自分の気づかないところで誰かのためになったり、かたや誰かに助けられていたり・・・」そのような視点に気づかされハッとしました。

絵本につづられた文字と美しいイメージを、時には自己の経験に照らし合わせながら、ともに感受できるおとなは、それだけに絵本の醍醐味を深く味わうことができるのではないのでしょうか。

斎藤隆介は、あとがきに次のような言葉を寄せています。

「日本の人民は、自分たちをおさえつけていたものをとりのぞかれて、自分を一杯に生きる自由の喜びの中から戦後の歴史を始めました。しかしまた、戦後の歴史のもう一つの太い心棒は、われわれは一人ではなくてみんなの中の一人だ、という自覚を持ったことです。(中略)

そして更に、一杯に自分のために生きたい命を、みんなのためにささげることこそが、自分を更に最高に生かすことだ、と信じてその道を歩きはじめた人々がおおぜい出てきました。『花さき山』はそういう人々への賛歌です。

そして、そういう少年少女が、この国にたくさんたくさん生い育ってほしいという作者の祈りの歌です。」

このメッセージは、『花さき山』より先に出版された『八郎』や『三三』を受け継ぐものでもあります、こちらもの2冊も併せてお勧めします。

※『花さき山』『八郎』『三三』本学図書館にあります。

## たいせつなこと

マーガレット・ワイズ・ブラウン (1910年～1952年) さく  
レナード・ワイズガード (1916年～2000年) え  
うちだ ややこ (1976年～) やく  
フレーベル館  
対象年齢：5歳から サイズ：B5

絵本のプレゼント交換が流行(はや)っていた高校受験の頃から時を経て、楽しくも慌ただしい育児(育自)に励んでいた頃、大学の先輩から「お母さんになったあなたへのプレゼント!」と、手渡していただいた懐かしい絵本です。

『スプーンは たべるときに つかうもの ~でも スプーンに とって たいせつなのは …』から、始まります。

そして、最後の1頁前には『~でも あなたに とって』たいせつなのは』で終わり、最後の1頁には作者のマーガレットさんの答えが綴られています。どんな言葉でしょうか?

初めて手にした時に、今は亡き従姉(いとこ)の『ゆうちゃん、自分を大切にしてくれ』という言葉と従姉のいつもの笑顔が対(つい)になって浮かんできました。

ちなみに、内田也哉子さん(奇しくも従姉と誕生日が同じ!)の初めての翻訳絵本で、最後の手書きの端正な一文は、也哉子さんの夫、本木雅弘さんの自筆だそうです。

# 開運えほん

かんべ あやこ (1956年～) さく あかね書房  
対象年齢：幼児から サイズ：A4 変型判

大学時代の友人と作者のかんべあやこさん（新潟県在住）との偶然？のご縁から、昨秋に巡り巡り、新潟県内の栄養教諭の方々へ紹介した、食育教材として活用できる絵本です。

『おばあちゃん これは なあに？』孫に玄関の門松の由来を訊かれる場面から始まり、年神様にそなえる鏡もち、年越しそば・おせち料理・各地のお雑煮（もちろん新潟県も）・七草がゆ等が、開運につながる縁起物やお正月行事とともに、三世代家族の団らんの光景の中で、あたたかく描かれています。

これからでも、遅くはありません。開運をめざして、あなたも手に取ってみませんか。

## ひまなこなべ

文・萱野茂 絵・どいかや あすなろ書房

つい最近出会ったばかりの素敵な絵本を2冊紹介します。一冊目は、『ひまなこなべ』。わたしは、2年前の夏、初めて北海道に行きました。そして、念願だったアイヌの里、二風谷を訪れたのです。今はなき民宿「ちせ」に泊まった晩、そこで知り合った写真家の方にこの絵本を紹介してもらいました。この絵本は、アイヌの昔話「暇な小なべ」を絵本用に語り直した萱野茂さんの文にどいかやさんの絵が加わったもので、自然と人間が分かちがたく結びついたアイヌの世界観が見事に濃縮されたすばらしい絵本です。絵も文もとてもユニークで、なんどでも繰り返し読みたくなり、そこで描かれている「熊送り」(イオマンテ)の儀式とその奥深い世界に惹きこまれます。私は運命のような出会いの中でこの本が大好きになりました。ぜひ多くの人に手に取ってほしいです。

## 花ばあば

絵と文・クオン・ユンドク 訳・桑畑優香  
ころから

二冊目は、日本軍慰安婦だった故ピヨン・キジャさんの証言をもとにした彼女の人生を描いた絵本です。慰安婦という言葉を知ると多くの人は身構えてしまうかもしれません。でも、この本は、もちろん厳しい現実も描かれていますが、ピヨン・キジャさんの言葉に耳を澄まし、深くその声を聞き取ろうとする愛情と知性にあふれた絵本です。ぼくは、まずこの本の最初におかれた著者クオン・ユンドクさんからのメッセージに深く共感しました。「私たちは、(…)まず彼女たちが経験した痛みと共に感ずる姿勢を持たなくてははいけません。証言は、事実を証明する資料である以前に、真実を明らかにすることで証言者自身が大切な人として、生まれ変わる過程でもあるからです」。この絵本のような視点から世界と歴史をもう一度、見直してみたいと思います。

2018 年度卒業・2019 年度入学記念

## どこでもドアのかぎ 2019

新潟県立大学生生活協同組合

教職員フォーラム 「どこでもドアのかぎ」編集委員会 編

バックナンバーURL:<http://www.unii.ac.jp/~ktcoop/dokodemo.html>

表紙イラスト 仲佐梨奈

2019年3月19日 発行